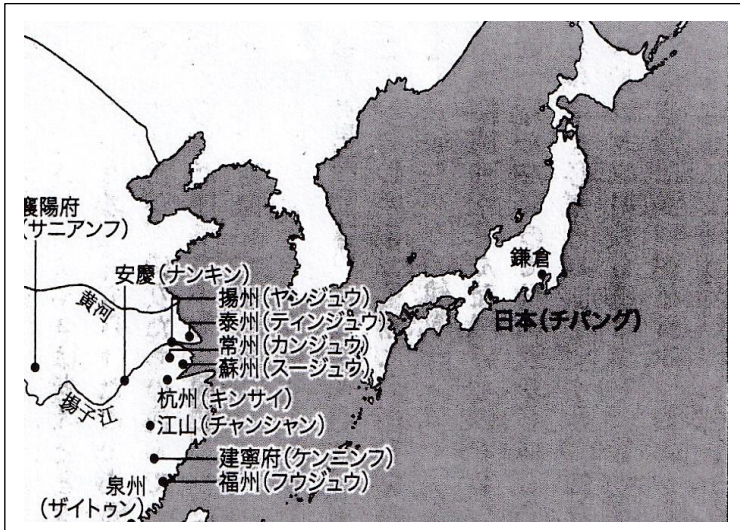


マルコ・ポーロ東方見聞録—5

マンジ（華南）の旅とジパング

八柳 修之

さて、マルコは大都に戻った後、フビライの命令で3年間、中国で有名な大都市、揚州の知事に任命された。揚州へ行く途中、マルコはカタイ（華北）の乙女たちの貞淑さを絶賛している。特に嫁に出す場合、父親は未来の夫に娘が処女であることを保証しなければならず、その方法について縷々述べられている。



揚州

人口： 457 千人 (2021)

北京から 鐵道 880 k m

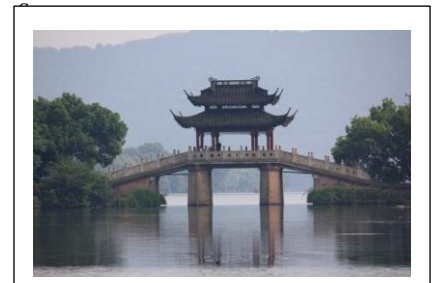
泰州（ティンジュウ）を後に、多くの町や村を通して、南東へ旅すること1日で揚州という大都市に着いた。非常に重要な都市かつ強大な都市で商業が盛んで27の大都市を取締りまわっていた。マルコは水の都で青い山々遠くに見え、久しぶりに故郷のヴェネツィアを思い浮かべるのだった。知事の仕事は監察官として、揚州を中心に各地を見回ることであった。揚州の住民は主に商業や手工業で生活しているが、大量の騎兵や歩兵用の軍装品が作られている。2年間、駐在した割に記述は少ない。その後、常州（カンジュウ）を経て蘇州に至った。**蘇州** 水の都 立派な大都市であり、大量の生糸を生産し衣服用の絹布の算出が多い。住民は商業、手工業を営んでいる。武人は少なく商才にたけた商人、職人、哲学者、名医、さらに大勢の魔術師、巫術師がいる。この町には6,000もの石橋があり、16の衛星都市があり、いずれも商業、手工業ともに繁盛している。



常州：2500年もの歴史を持つ
風光明媚な都市 北京から 960 km



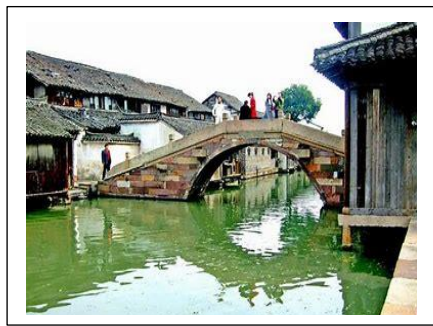
蘇州：上海に隣接
風光明媚



杭州：人口 1936 万人

杭州 127年以來、南宋の首都。マルコは「まったくここは世界で最も富み栄えた都で話がある」と語っている。杭州湾に注ぐ銭塘江という河口にまたがっていて、周囲はざっと160 km、町の中には沢山の運河が走っていた。10の広場があり、そこで週3回、4~5万人の人が集まって市が開かれ、海のもの山のものなんでもある。

杭州の町の説明は「東方見聞録」の全巻を通じて最も詳しい記録である。(長沢) 街路を通っても、運河を通っても、城内どこへでも行くことができる。市内には 12,000 の橋があり、大部分は石造りである。いつも 10 人の衛兵が常時橋の袂に駐在し治安を保っている。衛兵の数は全部で 6 万人。このほか、冷水浴場 (少なくとも、3,000 以上あり入浴した後でないと食事をとらない)。12 の工匠組合 (各々の組合は 12,000 の家内工業)、美しい邸宅が沢山あって構造が巧妙で装飾も豪奢である。宮殿の周囲は 16 km の高い城壁で囲まれている。御殿の後ろには後宮があり、豪奢の限りを尽くした装飾を施した部屋が沢山あった。外国との貿易はキンサイから 16 km 離れたガンフ港。防火施設、警備など詳しく報告されている。 下の 3 枚は杭州



杭州のあと、マルコはさらに南方各地を旅行した。江山 (チャンシャン)、建寧府 (ケンニンフ) を過ぎて福州 (フウジュウ) に着いたが、この辺の住民が、どんな汚いものでも、平気に食べるのに驚かされた。また人食いトラが沢山棲んでいたと述べている。トラの肉は美味しく、皮は高い値段で売れる。福州から 5 日で泉州 (ザイトゥン) という大都市に着いた。ここは港町で高価な商品や宝石をいっぱい積んだインドの船が入港していた。大ハーンは、ここから莫大な税収を得ている。



建寧府 (かつて存在)、
権寧府文廟

福州 北京から 1562 km
人口 842 万人(2020)

泉州 福州から 156 km
人口 865 万人(2017)

ジパングについて

以上でマンジ (華南) への旅の記録は終わっている。その後、マルコ等は帰国することになるが、ここで、初めて日本 (ジパング) のことを世界に紹介したことを述べたい。もとより、伝聞によるものであるが、日本は非常に金と真珠の豊かな国として紹介し、有名な弘安の役の経過を詳しく述べている。

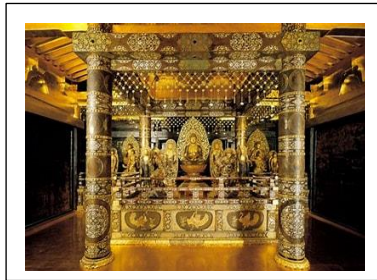
「チパングは東の方、大陸から 1500 マイル (2400 km) の大洋にある。まことに大きな島である。住民は色白で、礼儀正しい優雅な偶像教徒である。ここは独立国で、彼ら自身の国王をいだいていて、どこからも干渉されない。この島では非常に豊かに金を産するので国民はみな莫大な黄金を所有している。それに大陸からは、商人さえもこの島へ来ないので、黄金を国外に持ち出されなかった。いま話したように、莫大な黄金のあるのもそのためである。

また、この島にある国王の宮殿の概要について述べよう。この国王は、すべて純金で覆われた非常に大きな宮殿を持っている。われわれが家や教会の屋根を鉛板でふくように、この宮殿の屋根は全部純金でふいている。その価値は、とても評価できるものではない。さらに宮殿内の各部屋の床は、全部指二本の厚みのある純金で敷き詰めている。……この国では沢山の真珠がとれる。……この島では、人が死ぬと土葬と火葬とが並び行われるが、この島では、土葬にするときは、死んだ人の口の中に真珠を一つ入れる。……本当に豊かな島で、その富は語りつくせぬほどである。さて、この莫大な財宝をもつ島国について耳にした大ハーン、すなわちいまの皇帝フビライは、この島を征服しようと思いついた。……

以下、長沢の記述。ここに見える純金で覆われた宮殿というと、すぐ連想されるのは足利義満が建てた金閣寺だが、金閣寺の建立は1394年のことで、マルコ・ポーロよりも一世紀以後のことである。もっともわが国では持仏堂など、金箔で覆うことはしばしば前例があったらしく、有名な奥州平泉の中尊寺金色堂（1124年落成）などもその一例で、こうした建物の噂が、さらに誇張されて、指二本の厚みのある純金で敷き詰められることとなったのであろう。このことがまた近世になって、日本の近海に金銀島があるという話にもなったのである。



中尊寺金色堂



金閣寺



このように莫大な財宝をもつ国をぜひ征服しようとして元寇が始まるのである。1274年にまず文永の役があり、ついで1281年（弘安の役）の夏、フビライ・ハーンは14万の兵士たちを4,400隻の船に乗せ、日本の壹岐、対馬や博多湾に攻めてきた。ところが、大暴風雨に見舞われ、大艦隊はほとんど沈没したり破壊された。二人の将軍は多数の兵士を見殺しにして本国に逃げてしまった。帰国後、二人は大ハーンの怒りをかい処刑された。

蒙古軍を襲った台風が神風神話となり、敗戦まで信じられていた。私が子供の頃、我が儘を言って泣いたりすると、祖母は「もう来るぞ」（蒙古来襲）と言われたものです。

日本がチパングの名で、黄金の豊かな、真珠が採れる国として、初めてマルコ・ポーロによって西欧に伝えられた。コロンブスが大西洋を西に進んでアジアに航海しようとしたのも「東方見聞録」を読んだ結果であった。そして、こうした見聞がもとになって、大航海時代をすぎても、何人かの航海者たちが、金銀島を日本の近海で熱心に探し求める原因となったのである。（この項完）